



## 知の創造としなやかな人材の育成により 地域に・世界に貢献する山口大学

山口大学 学長 谷澤 幸生

## ダイバーシティとAIの融合で挑戦する — 研究の活性化・効率化 —

山口大学 副学長 鍋山 祥子

AI (Artificial Intelligence) は近年目覚ましい発展を遂げており、私たちの生活にも AI は浸透しつつあります。すべてのもの、さらには人までインターネットに繋がり、DX (Digital Transformation) を通じた働き方の変化によって社会が高度に効率化されようとしています。

大学においても、教育、研究、医療において ICT (Information and Communication Technology) の活用や DX の積極的な推進を行っています。

そのような中、2020 年度に採択された文部科学省科学技術人材育成費補助事業「ダイバーシティ研究環境実現イニシアティブ(牽引型)」の一環として、女性研究者の研究活性化や効率化を図るべく「AI 研究デザインプロジェクト」を開始しました。このプロジェクトは、既存研究に AI を活用することで、研究の効率化を図るだけでなく、新しい視点を持つきっかけとなり、結果、研究が活性化されることを目指したものです。

既に、AI は人間と密接にかかわっており、今後、ますます重要な存在になっていくことでしょう。AI に仕事を奪われるのではなく、人間が AI を活用し、AI の能力を最大限に活用していくことが大切です。互いの強

みを生かしながら、人間と AI が共生することができれば、これまでにない研究の成果が生まれ、より豊かな社会を実現することにつながります。

また、AI に限らず、今後ますます世の中は変わっていきます。その変化に対応するためには、「しなやかさ」が重要です。「しなやか」という言葉からイメージされる竹は、変化に応じて形を変え、曲がるけれども折れず、強い回復力を持ち、広く根を張って成長します。鋼とは違う意味での強さがあります。

このように絶え間なく変化する世の中にあって、その変化を敏感に感じ取って対応し、未来を切り拓き、前に進んでいくための「しなやかさ」を備えた人材を育成していきます。同時に、大学としても、研究・地域・ダイバーシティ・経営の全てにおいて「しなやか」に対応していきたいと思っています。山口大学は、山口県の地域から頼られ、地域に必要とされる魅力ある大学としてこれからも進化してゆきますので、皆様のご支援をどうぞよろしくお願いいたします。

最近よく耳にする「AI (人工知能)」ですが、始めて人工知能が出現してから、まだ100年も経っていません。今、まさに私たちの足下で急速に発展している AI、この AI を研究に活用するための支援を行っているのが「AI 研究デザインプロジェクト」です。

2020年度から実施している「AI 研究デザインプロジェクト」は、女性研究者を含む研究グループが AI を活用して行う研究プロジェクトを支援するというものです。2022年度までの3年間で14組のグループの研究を支援してきました。この中には、分野を越えた共同研究や、文系と理系の垣根を越えた研究、さらに、機関を越えた共同研究につながったものもあります。

このパンフレットでは、本プロジェクトを活用して研究に取り組む13名の女性研究者を紹介します。研究期間が1~3年という違いはありますが、新たな発見や社会貢献につながる成果を目にしていただけると幸いです。

「AI 研究デザインプロジェクト」は、文部科学省科学技術人材育成費補助事業「ダイバーシティ研究環境実現イニシアティブ(牽引型)」の一環として行っ

ており、本プロジェクトの他にも、女性研究者比率や研究力の向上、女性上位職の増加に向けた様々な取り組みを行っています。事業の実施にあたっては、山口大学だけではなく、共同実施機関として山陽小野田市立山口東京理科大学、宇部工業高等専門学校、UBE 株式会社、株式会社トクヤマの5機関、そして、13もの協力機関のみならず(山口県産業技術センター、山口フィナンシャルグループ、山口県、宇部市、山口市、山口県立大学、山口県農業協同組合、東ソー株式会社南陽事業所、三菱重工業株式会社下関造船所、東京海上日動火災保険株式会社山口支店、山陽小野田市、宇部フロンティア大学、SOMPO ひまわり生命保険株式会社山口支社)とともに「山口ダイバーシティ推進加速コンソーシアム」を組み、連携しながらダイバーシティの推進に取り組んでいます。

最後になりますが、こうした女性活躍推進の取り組みにご賛同いただける機関様がいらっしゃいましたら、ぜひ協力機関としてご参画いただけますようお願い申し上げます。

本事業が多くの機関や山口県における研究力向上につながり、地域全体のダイバーシティ推進の一助となるよう進めてまいります。